

優先順位が高いのは？

- ① 船を造る材料集め
- ② 島の内部の調査
- ③ 前に発見した洞窟を……

野外

「アタシなら、この砂浜にいるから心配ないサ」と言うドレイルを後に残し、支度を終え、鬱蒼とした森に分け入って島の奥へと向かった。

今回は誰かの命が危険にさらされているわけでもないため、より注意深く歩みを進める。前方に何ら危険がないことを確認しつつ、ゆっくり藪を抜けた。あの奇妙な旋律は、さらに大きくなっていく。

一時間後、目の前に広場が現れた。森の中にも関わらず、大きな石の構造物がある。ところがいきなり、諸君の注意は右側の動きへと惹きつけられた。奇妙な縞模様で鮮やかに着飾った小柄なヴァームリングの斥候が、森の奥へと逃げていく。他の連中に、こちらの存在を告げに行ったに違いない。

選択 A：ヴァームリングを無視して石の構造物を目指す。

選択 B：ヴァームリングを捕らえ、自分たちの存在を悟られないようにする。

m3

選択肢: ヴァームリングを捕らえる

目的: トーテムポールの破壊&キャラクター数の7倍の焼肉を運搬

序幕:

報復に燃えたヴァームリングの待ち伏せを懸念しなくてもなかったが、ともかく森の中へと逃げていく影を追う。しかしながら捕まえることはおろか、近づくのでさえ予想より困難であった。

ヴァームリングは巧みに逃げ続けた。逃げたとおぼしき方向を捉えるだけで精いっぱいだった。すると突然、開けた場所へと出た。全員が同色の羽毛や草でできた衣装で身を包んだ、小さな生き物で一面埋まっていた。

諸君の到着を見たヴァームリングどもは、シャーッと奇声をあげて威嚇してきたが、武装してはいなかった。うちひとりが前に進み出て、大声を発する。諸君は武器を手にも構えた。

「待つじゃ！」そいつが言った。「わたしには見覚えがある！ そやつらは黒咬(くろかみ)族を屠ったやからだ！ 敵ではない！」まだ完全に状況を呑みこめたわけではなかったが、そのヴァームリングが近づいてくると、思わず手を差し出していた。

「おんしらは、数多くの黒咬族と魔神を葬った勇者じゃな？」と尋ねてくる。どう反応するのが正しいのかわからなかったが、とにかく頷いた。「やはりな！な

らば、きゃつらの放逐を手伝ってくれような？」再度頷くと、ヴァームリングの集団から目に見えて緊張が緩んだ。この族長はアントグートと名乗った。彼ら窟骨(くぼほね)族は、長いあいだ黒咬族と抗争を繰り返している。しかし最近になって、黒咬族は魔神を使役し始めた。

アントグートは、魔神の介入によって、この戦が黒咬族に優位に進むのではないかと危惧している。そして諸君の到来時、まさしく敵神殿の攻略準備を進めているところだった。

「戦の前には」アントグートは説明した。「わしらは先祖の力を借りねばならぬ。じゃから今から、儀式としての祝祭を開く。おんしらも参加してもらえたら光栄じゃ」この祝祭で最も大事なものは、肉の調理だ。ドレークの新鮮な肉、それも洞窟付近で仕留めたものを、すぐそばいて、調理洞まで運んで焼き、祝宴の席に供さねばならない。その間に、敵部族のトーテムポールの周りを踊りながら、攻撃をしかける。

「重要なのは、肉が十分に焼けることと、トーテムポールが破壊されることじゃよ」アントグートは断言した。「神聖な任務じゃが、おんしらはもう黒咬族を殺し慣れておる。わしらの先祖は、おんしらをこの任務に選んだのじゃ」

特別ルール:

肉が「運搬された」と見なされるには、これから説明する一通りの手続きを完了させなくてはなりません:

まずテーブル **a** に隣接しながら攻撃します(この場合、遠距離攻撃でも不利になりません)。与えたダメージの分だけ、生肉として肉トークンを獲得します(肉トークンとして、キャラクターボード上に、同数のダメージトークンを置いてください)。自分の手番では、いつでもこの運搬中の肉トークンを捨てることができますが、肉を運搬中のキャラクターは、それ以上の肉トークンを(追加で)獲得することはできません。

生肉を持ったら、次は燃える地面 **c** に隣接するヘクスで移動を終了し、**c** ヘクスに肉トークンを置いて焼き始めなければなりません。毎ラウンド終了時、**e** ヘクスにある全肉はボード上から除外され、**d** にある全肉は **e** に、**c** にある全肉は **d** に移動させます。

e ヘクスに隣接しながら攻撃すると(この場合、遠距離攻撃でも不利になりません)、最大で与えたダメージの分だけ、**e** にある肉トークンを、焼肉として獲得できます(上限は **e** ヘクスにあるトークン数まで。獲得したら、キャラクターボード上に置いてください。また生肉と区別するために、何か別のトークンを一緒に置いてください)。肉を運搬中のキャラクターは、やはりそれ以上の肉トークンを(生だろうと焼いてあろうと)獲得できないこと



使用する
地形タイプ:

- Lib
- M1b
- B4b



ヴァームリングの斥候 大鎖蛇 イバラの茂み(x4) 燃える地面(x3) トーテムポール(x1) テーブル(x2)

は、忘れないでください。焼肉を運搬中に、**①**のテーブルに隣接するヘクスで移動を終了すれば、運搬完了となります。

青の洞窟 (B4bタイル) で自分の手番を終えたキャラクターは、2ダメージを受けます。

①のトーテムポールは物標で、HPはC×18です。召喚獣は、トーテムポールを狙うことはできません。

ヴァームリングの斥候は、通常どおり移動を阻害しますが、それ以外の点では仲間と見なします。そのモンスター能力カードは、毎ターンの開始時に通常どおり公開されますが、カード上の能力を実行せず、その代わりに今囲んでいるのは別のイバラの茂みを囲みます (六角形の陣形を維持しながら、別の茂みへとテレポートさせます)。次に囲むイバラの茂みは、行動順位が53以下なら時計回りで、54以上なら反時計回りで次のものとなります。このときヴァームリングの移動先が他のコマで埋まっていたら、代わりに一番近い移動可能な空きヘクスへと移動させます。その次の移動では、(可能ならまた) 元どおりの六角形の陣形を組みなおしてください。

C×3だけの焼肉の運搬を完了したら、

①を読んでください。



肉の臭いに引き寄せられて、大蛇たちが森から姿を現した。

「儀式の邪魔をさせるでない！」アントグートは叫んだ。

特別ルール:

毎ラウンド終了時、**①**ヘクスから大鎖蛇が1体発生します。2人ゲームなら、通常モンスターです。3人なら、奇数ラウンドには通常の、偶数ラウンドには上級のモンスターです。4人なら、すべて上級モンスターです。大鎖蛇は、パーティおよびヴァームリングの斥候にとって、敵となります。

終幕:

すべての焼肉を運び終わると、窪骨族の詠唱は不意に終わりを告げた。残りの大蛇を始末するあいだにも、焼肉はかすかに金色に光り始める。テーブルを囲んでまさに祝祭を始めようとするヴァームリングたちを、戸惑いつつ眺める。アントグートが近づいてくる。

「本当に感謝しておる」微笑んでいる。「おんしらがおらなんだら、儀式はうまくいかなかったことじゃろうて」アントグートがそう話す間にも、テーブルのあたりからは、奇妙な不協和音が聞こえてくる。

「実は、わしは嘘をついておった」そしてそう告白した。「先祖がわしらに授けたのは、戦う力などではなかった。逃げる力なのじゃ」

その時、テーブルの辺りから聞こえてくるのは、鳥のさえずりだと気づいた。ヴァームリングの一団は、目の前で姿を変え始めた。痛みで地面を転がりながらも、腕をやみくもにパタパタと振っている。その腕はゆっくり翼となり、口はくちばしとなり、足は鉤爪となっていく。

「よかったら、おんしらも食べるがいい」アントグートは判然としない表情だ。「ヴァームリングならざる者に効くかどうか定かではないが、おんしらにはお礼として、この程度のものしか授けることができるのじゃ」そして話を終え、テーブルへと向かった。

報酬:

各人チェックマーク✓1つずつ
生き残ったヴァームリング1体につき各人2XPずつ

アイテム106番〈牙の首飾り〉